
闇の帝王（ダークエンペラー）

kyouya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「」のPDFファイルは、「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇の帝王

【Zコード】

N8974M

【作者名】

k y o u y a

【あらすじ】

水鏡 鈴音。それがこの少女の名前。

「」へ普通の日常を喰む一般人・・・だった。

彼女は出会った。

感情を自らの力に変え、戦う術士、心術士（オーラ）。

その術士の中で、『闇の帝王』（ダークエンペラー）と呼ばれ、畏
怖される男、霜月共夜。

2人が出合つとき、光と闇の究極の戦争が、始まる――――！

登場人物紹介（前書き）

これからいろんな人が出てくるので、挿絵を入れていろいろ説明していきたいと思います。

心強い助っ人のおかげで、挿絵ができます。

この絵を描いてくれたのは、わたやさん（僕の友人）です。

僕と同じく皆さんも満足して頂くことを願っています。

登場人物紹介

・ 霜月 共夜

> .i10321 — 1481 <

紺色の髪をした、赤く光る刀を持つ、17歳の少年。

その正体は、『心術士』（オーラ）達の中でも畏怖される、『闇の帝王』（ダークエンペラー）と呼ばれる『心術士』（オーラ）。

・ 水鏡 鈴音

> .i10320 — 1481 <

ひょんなことから共夜と出会った、17歳の少女。

共夜と出会ったことで、光と闇の戦争に巻き込まれていく。

テニス部所属。

・ 『心術士』（オーラ）

自分の感情を、世界に干渉させる力に変換し、常人を越える者達の総称。

古今東西で、魔術師、呪術師、陰陽師などと呼ばれている。

その力の根元は、『魂氣』（こんき）と呼ばれるものが術士の心にシンクロして、現実に発せられている。

使う者達に、2種類の者があり、『聖人』（レム）と『咎人』（ヒガビト）と呼ばれている。

- ・『聖人』（レム）

本来あるべき『心術士』（オーラ）の姿。

- ・『咎人』（ヒガビト）

七大罪の感情のうち、一つでも強くそれを抱き、『心術士』（オーラ）になったものとなる、闇の姿。

厳密には、闇の道を行く者の中で、1種類のものを指す。

- ・『咎人』（ヒガビト）

別名シャドウ。

人間だつた者が、『咎鬼』（とがおに）に心の闇を無理矢理引き出されになつてしまつた姿。

理性は無くなつており、本能のままに動く。

- ・『咎鬼』（とがおに）

自ら進んで闇の道を歩んだもの。

ほとんどが『地獄ノ番犬』（ケロベロス）と敵対しているが、共夜などの例外もいる。

登場人物紹介（後書き）

小説を書いていくうちに、いろんなイラストと説明加えていきます。

非日常の闇の戦い（前書き）

kyouuyaです。

「とある墮天使の聖戦」の方は、思つたよりもすばらしい反響（そういうものない？）でした！！

今回描くのは、オリジナル小説です！！

温かい田で見守つてくださいね！

この作品も、「とある墮天使の聖戦」も、どうぞよろしくお願いします！！

非日常の闇の戦い

「これはなに？」

私は確かに、普通に学校に通っていたはず。

私は確かに、普通に部活をして、今家に帰る途中のはず。

…そこには何がなに？

体が黒く、人のような形をしている…

でも…絶対人間じゃない。化け物。少女はそう思った。

そして…その化け物の前に立つ、これまた真っ黒なコートに身を包む人。

（なに…これ…映画の撮影かなんか…？）

だが、化け物の足元を見れば、そんな考えは簡単に消える。

だが、見ないようにしていた。

見たくなかつた。

2、3人の人の、血塗れの死体。

あまりにもリアルすぎた。

血の色も、そこに漂う鉄のにおいも。

においなんて、映画には必要ない。

(あれ…本物…?)

そこには、もう普通の少女は、そこには立つかへぬ。

(なんにしても…あの人…早く逃げないと…――)

しかし、すでに遅かった。

「ヴォオオオオオオオオオオオオオオ！」

化け物がうなる。

そして、男に襲いかかつた。

(ツツー！)

少女は、目を覆う。
これから起くる惨劇を、見たくないかった。

ザシユ！－ブシャア！－グチヨ！－

(ツツツー！)

耳もふるべ。

あまりにリアルな、肉を引き裂く音。

五感すべてが現実を伝えてくる。

(ああ…ああ…)

きっとあの人は殺された。そうに違いない。

(ビハシナハ…私のところに来るかも…)

少女は恐る恐る田を開く。

そして見た。

その人は、生きていた。

死んだのは…化け物の方だった。

(え…！？)

少女は目を疑う。

そして…

「ハア…この世界にも咎人とがびとはいるみてえだな…」

は？なに？咎人とがびと？

意味の分からない言葉を話す黒コートの人。

声からして…その人は男のようだった。

「…全部斬り倒すか…ん？」

ビクッ！－

男がこちらを見た。

少女は思わず走った。

急いで家へと向かつ。

今日のことを早く忘れてしまおひ。

早く風呂に入つて、宿題して、好きなテレビ番組見て、さつやと忘
れてしまいたい。

これがすべての始まり。

これが、水鏡 鈴音と、霜月 共夜の出会いだった。

非日常の闇の戦い（後書き）

記念すべき1話！！

でも「とある墮天使の聖戦」より、人は来ないと 思います。

ツイッターが使えぬから、宣伝は無理。

どなたかいろんな人に教えてください！！

あと感想よろしくお願いします！！

口常（前書き）

1話だけで14ポイントも加算とか…

これは「とある墮天使の聖戦」のおかげかな？

なんにせよありがとうというしかない！！

「…なんだつたの…いつたい…」

少女が、学校で独り言を言ひつ。

少女の名は、水鏡 鈴音。

じくふつつの高校2年生。

その彼女は、昨日、非日常の現実を見た。

化け物。黒マートの男。死体。

(…馬鹿げてる…)

彼女は1人、考えていた。

——音ちゃん——

(あれは……夢だったのかな……)

——鈴音ちやん——

(じやなきや、あんな化け物…)

「鈴音ちやん…」

鈴音はビクッとした。

(えつーーー話しかかれただーーー、どうして…)

「鈴音ちやん…なによーっとしてのーーー。」

声をかけてきた少女は、藤井 萌。彼女の親友だった。

ふじい
もえ

「「」あん、萌むぎや。ちゅうと考え事しててね……」

「考え事…。鈴音ひやんがー。」

「なににやの皿こわ~」

「こやー、鈴音ひやんって特になんも考えないでなんかかわるタイプだから、やんなことしないかと…」

「なにそれ~。ひどーー。」

「「」あんまり、鈴音ひやん。」

(もう、夢だよあんなの。)

これが彼女の日常。

親友とおしゃべつして、授業せんじやく、部活でトースツして、好きな番組見て、一日を終える。

ただそれ繰り返し。

それでも彼女は満足していた。

「ねえ、今度新しくできたケーキ屋寄りない? あそこなかなかおこして評判なの。どう?」

「「」ぬーん、部活のせいで今日まにこなこの。」

「えーっ、そんなー。」

「ホント」ぬーん。」

「トースなんかやめたりやべつてー、鈴音ちゃん。」

「それは無理だよ、こぐらなんでも。ホント」ぬーん。でも、今度絶対いい。」

「絶対だよー?」

「約束するよー!」

「わかった。じゃあバイバーイ。」

「バイバーイ。」

いつも通りの生活。それが彼女を支えていた。

そして、こつもの日常が、こつものよひに歸れこへ。

「アーッ！」と叫んで、男は倒れた。

もつ一度、変な音が聞こえた。

男のお腹から聞こえてくるよだつた。

「……腹減った……」

「もはや我慢できないレベルまでに達したらしく。動く気配が全くない。」

「ちくしょー……！」で倒れるわけにはいかねっての……」

そして、男はある寮を見た。

そして
⋮

「えーいチクショウーー！」の空腹満たすためならば……！？」

そして男は寮の中に入つていつた。

— 1 —

「はあ、しんべー。」

鈴音が学校から出てきた。

部活で疲れていたらしい。少しぶりぶりと足がおきつかない。

「早く寮帰つて寝よー。」

ブウーン！…ブウーン！…

携帯がバイブした。

学校では原則、携帯は禁止だが、鈴音も、他の生徒も、そんな規則はどこ吹く風。

ただ、先生たちに見つかるとめんどくさいの、バイブにしているのが常識だった。

(ああ、まだバイブのままだっけ?)

携帯をとりだし、開く。

藤井 萌。

携帯の画面に名前が出ていた。

『鈴音ちやーん。今日は部活だった? こつちはケーキ屋に行つてみたけど、すっごくおいしその!! ショートケーキが、クリームもイチゴもすっごい甘くて最高!! 今度、一緒に食べよ! 約束だよー!!』

フフッと鈴音は笑う。

相変わらずの親友。

彼女はいつもこんな感じだ。
いつも通りの日常だと思い、鈴音は安堵する。

そして鈴音は彼女に返信メールを送る。

『いいなー。ケーキ私も食べたーい。今日部活がすっごくキツくて
さ、甘い物が欲しいの。今度部活帰りにでも寄つていこつかなー。
ちゃんと約束は守るよ。バイバイ。』

パクン、と音をたてて鈴音は携帯をたたみ、しまう。

もう辺りは暗くなっていた。

あちらこちらで蛍光灯が光り、家から明かりが漏れている。

寮についての鈴音。

(ええっと、今日のおかずなにこしょつ? 食材はこの前置つたとこ
だし…)

ガツガツムシャムシャパクパク。

(…?)

なんだれつへ、扉の奥から何か音がある。

(ツツツ！?)

これは彼女の日常ではない。

(え? なに? もしかして、あの化け物が…！?)

ガチャ。

恐る恐る扉の鍵をあける。

そして…奥には…

ガツガツパクパクムシャムシャ。

化け物はいなかつた。

いたのは…

私の作った料理とかを片っ端から食べていく1人の男だけ。

「…………」

そしてその男はこちらを見た。

「…………」

男は口の中の食べ物を飲み込んだ。

「…………だれ？」

ドゴホー！！

鈴音の膝蹴りが、男の顔面に炸裂した。

口算（後書き）

この作品と「とある墮天使の聖戦」は、一週間に一回のペースで作っています。

とあるのせりを楽しみにしていたみなさま、すいません…！

「いつてええええええ…いきなりなにしゃがんだコノヤロー…」

男は上の虫ぐらこの顔だった。

年は・・・一七歳ぐらいい?

髪は、黒とも青とも言えない色だった。（紺色?）

服装は、今が冬であるのに、少し寒そうな格好である」と以外は、普通だった。

黒いズボン。灰色のシャツ。

「なにつてそりや、腹減ったから」の寮に

「つせつけえ…」

バキイー!!

「グルーヴサミンーー」

意味不明な叫び声。

2発目の暴力。

格闘界にいる人ならばスカウトしたくなるような、見事なシャイニング・ウィザードだった。

「ぐおおおおおーー」めかみがああああーー

「つべならもーとマシなうそつけーー」

「テメエいくら自分が美人だからって、『んな』としてつと男に逃げられ」

「ううさいわあああああーー」

ガ「オー！」

「ほづああああああああああああーー！」

3発目。

回し蹴り。男はもはや普普通音を出して煙が出ている。

鈴音は確かに美人だった。

顔は上の上。

黒く、長い髪はつやがあつて、なめらかだった。

その肌は、テニスをしているのに日焼けをあまりしていない。

輝くような白い肌。そしてなめらかな黒い髪。

その白と黒のコントラストは、見るものすべてを魅了する。

・・・が、そんなことは今はビリでもここ。

「あんたなに他に物色したの……答へなさい……！」

「物色なんかしてません……」の部屋の奥のタンスの中が下着だらけだったとか俺は知る

死亡フラグ連発。

男がボロ雑巾のように成り果てたのは言つまでもない。

「つたくあの男通報してやるから……。」

そして鈴音は自分の部屋のドアを開ける。

「おーもひーライラかなーーー。」なんなんじゅ気が・・・

鈴音の声が途切れた。

鈴音は絶句する。

・・・あるものを見たから。

あのときの、黒いゴート。

(・・・え?)

それがハンガーにかけられていた。

(・・・なに・・・?)

「ううう・・・体中痛い・・・ん? どうした?」

鈴音は絶句している。

「おーい。どうしたー？」

「…………なに…………あれ…………」

「…………あー。」

「あれ、俺のコート。」

鈴音は耳を疑う。

「・・・あん・・・たの・・・?」

「ああ、ちょっとばかり汚れてたから、洗濯をしてもうったから、今干してんだ。」

鈴音は、『一』にあるものを見つけた。

血痕。

男はあの化け物を斬り殺して血まみれになっていた。

そして、思ひ出した。

(あれ・・・?)

認めたくない」とだつたが、認められるを得ない。

(・・・じこつの・・・頃・・・)

そつ、確かこんな声だった。

すこし高い声。

間違えるはずがない。

こんな声だった。

そして、脳裏にある考え方があがむ。

(・・・じゃあ・・・)

だから先ほどの声の「」とを認めたくなかった。

「」の「」とを認めたくなかったから。

(・・・「」の前の「」とウハ・・・・)

――ヤメロ――

(・・・あれは・・・)

――カンガエルナ――

(・・・あれは・・・)

やつらのなかへと飛び込んだ。

「俺のじやなれや誰のだ？お前も」

(轟ごや・・・なかつたんだ・・・)

鈴音が倒れるまでは。

ドサ・・・

「一・?」

男は驚愕する。

「おい、どうしたー? おいー!」

(・・・) (・・・)



鈴音は起きた。

(・・・あれ・・・?なにが・・・)

そして、思い出した。

あのことが、夢ではなかつたことを。

(・・・・・)

未だに認めたくない」とだった。

「・・・あの男は・・・?」

あの男がいない。

もう、帰つたのだろうか。

そのとおり・・・

ガチャツ。

「おー、田え覚めたか?」

男がやつてきた。手に鍋を持って。

「…？」

「だいじょぶか？熱でもあつたのか？」

「あ、あんたなにして…」

「ああ、だつて急に倒れたもん、そんなのほつとけむかよ。」

「…・そう・…」

「粥つくりたけど、いるか？」

そうじつて、男は鍋を鈴音に渡す。

「…・ありがと・…」

「それ食べてから言つてくれ。」

「・・・うん・・・」

スプーンを持って、粥をひとすくいする。

そして、それを口に運んだ。

パクッ。

粥は熱かつた。

だが・・・

(・・・!)

すいぐおいしかった。

「どうだ？」

「……おこし……」

「そりゃどーも。」

鈴音も一人暮らしをしているから、多少料理は心得ているが、男はそれ以上にうまかった。

鈴音は粥をパクパクと食べて、平らげた。

「……そんだけ食欲あいやあ、大丈夫だな。」

そして、男はふとこちらにかを取り出す。

なにやらたばこのようなものだった。

そして、それを口にくわえ、ライターで火をつけた。

「ちょっと、なにタバコすつてんの。私病人よ？」

そして、男ははあ？と返事をした。

「タバ」「じゃねえよこれ。」

「線香だ。せ・ん・こ・う。」

は？

鈴音は畠山とした。

確かに、線香特有のいい香りが漂つている。

「・・・あんた・・・なにしてんの・・・？」

「え？ いや、香りを楽しんでるだけだよ…？」

「いや、なんで口へくわえてんの？」

「なにこいつてんの？ 合理的じゃん？ 手に持つにもそんなのめんどくさいし、でもそういうこと持ち運べないし。でも、こいつすりゃあ手は空くし、持ち運びできるし、香りがちゃんとかかるし。1石3鳥じゃん？」

「・・・端から見れば変人よ？」

「・・・お前も理解できない口か・・・はあ・・・」

そして男は立ち上がった。

「さて・・・と。 そんじや、俺はこれで。」

そして、立ち去りうとした。

「・・・ねえ・・・」

ギクッ！

男は冷や汗をかいだ。

(やべえよ、このままこの雰囲気に紛れてどんずりじょひつと思ひてたのに、バレた!?)

だが、男が思つたこととは全く違つたが、鈴音から出た。

「……あつがと……」

男は鳩が豆鉄砲を食らつたような顔をした。

そして、優しい笑みを浮かべる。

「……べついたしまして。」

「名前……」

「……ん?」

「教えて……」

そして、男は少し黙つた。

そして、口を開く。

「・・・霜月 しもつき 共夜きょうやだ・・・」

そして男はそこを立ち去つた。

闇（前書き）

小説を両立させるのって難しい。

今まで実感してる。

作品の中で愛着があるのは、いつか…かな？

オリジナルであるだけに。

東京タワー 最上部。

ある男がライターに火をつける。

そしてその火を口元に近づけて、ある物に火をつけた。

それからよい香りが出てくる。

男はその香りを楽しんでいた。

「相変わらずそんなもんしてんのね？」

そうじつて後ろから声をかけてきたのは、女。

年は16歳ぐらいで、なかなかの美人。

茶髪を長く伸ばし、ところどころくせ毛がある。

どこかの制服を着ている。

シャツは白く、胸ポケットに大きくなと書かれていて、スカートは太い黒のラインと、極々細い白のラインが縦に交互に走っている。

だが、そんな制服をする学校は、日本にも、アメリカにも、ヨーロッパにもない。

この世界のどこにもない。

「前々から思つてたけど、おつかれさんやね？」

「うわー。」

またかよ、と共夜はつぶやく。

その一言に、頭に浮かべる女。

「いったいこんなところに遊びのような用事があるのでしょ？」
「ケロ
ベロス2番隊隊長、音撫おとなで女神様めがみ？」

共夜はからかうつむく。元気。

「あら、こちこちやんな」と皿の必要あるのかしら、アンタみたいな脳みそしたやつに。」

やれやれ、とこう風に共夜は肩を落とす。

「わざわざこんな世界に、おもろみたいのがやつてましたって
は…」

ええ、と女神は答える。

「ヤツがもういちじるしく来てるわ。一人。」

「隊長格がか?」

「ほんと全部が雑魚で構成された部隊だけどね?」

「……あー、めでたしかことになつたな。」

「……ねえ……」

「ん? と共夜は返事した。

「なんで、あの子の記憶消せなかつたの?」

「……? なんの話?」

「あんたそれが目的での寮にわざと忍び込んだんでしょ?」

「…………」

図星ね、と女神はつぶやく。

「やつしてわざわざ忍び込んで、ターゲットも都合よく倒れただって

の」「なんで?」

「…………」

共夜は黙っていた。

彼女の言つとおり、共夜は鈴音の化け物の記憶だけ消さうとして、あの寮に忍び込んだ。

そうしなければ、この世界は大パニックになるだらう。 いつそりやつてしまふ方が、こちらも動きやすい。

……だがそうしなかった。

「…………おれがあげようか?」

「何にもやるねーぞ。」

「……『アイツ』に似てるからでしょ?」

「アイジ」、「ジ」と言われて思ひ出すのが、長く黒髪。真っ白な、透き通るような肌。

そして……線香の香り……

「…………」

「……あんまり類似点はないんだけどね。……なんか似てるのよね……」

『アイジ』『ジ』

「…………」

「だからじつ……記憶を消したりしたとき、思ひ返してしまつ……」

『アイジ』

「少し黙れ。」

殺氣もつた声で女神を威嚇する。

女神は黙つた。

『気圧されたのではなく、自分の負をわびて、やうした。

「……」

「……といふで……」

「……ん？」

共夜は線香を鼻に近づけながら女神に尋ねる。

「やつらの話の、隊長は誰だ？」

女神は黙る。

バキッ、と音を立てて線香が折れた。

「あのクソやがつから」

「…………」

やつぱりな、と共夜は独り言を呟く。

「だからあの娘の」と話をしあげてきたんだろ？話題をめぐらすめぐらす
ために。」

「……それは……」

「もうなんだな？」

女神はうつむいていた。

一時の沈黙。

そして…

「…やつよ…」

次の瞬間、共夜は女神の前から消えた。

鈴音は昨日、眠れなかつた。

夢だと思っていたことが、現実だつた。

化け物。死体。鉄臭いにおい。

…そして、あの男。

「霜月…共夜…」

あの紺色髪の男の名を無意識に呼ぶ鈴音。

「えー？ 鈴音、誰の」と、それー？」

ビクッとして右を見る鈴音。

そこにいたのは彼女の親友、藤井だった。

「ねえ、それ誰の名前？ 鈴音の彼氏？」

えー？ とすつとさきよくな声を上げる鈴音。

「バカ、違う違う…！そんなんじゃないって。」

そんな反応をする鈴音を見て、藤井はホホウ、ソウカソウカと一人頷いている。

「はつはあーん？鈴音、美人だから告白でもされたの？それとも自分がしたの？ビッチー？」

鈴音は顔を真っ赤にした。

「ちちちち違つ違つ…！そんなんじゃないんだから…！ホントに…！」

「またまたあ？照れちゃって。ね、どんな人？教えてくれない？」

だーかーらあ…と返事する鈴音。

ほめへ、ヒーヤー！やしながら鈴音をからかう藤井。

帰り道、鈴音は化け物のことについてなにも考えなかつた。

「つたぐ、萌のやつ、なに言つて出すんだか。」

頭から湯気を出しながら、鈴音は買い物に出かける。

ほとんどの食材は、あの共夜とかいう男にほとんど平らげられていた。

最低一週間分の食材はあつたはずだが、それを一人で平らげる時点で普通の人間ではない、と鈴音は思つていた。

(……なんだつたんだる？……？あれ……)

いま、思い返すのは、あの化け物。

人のような姿をしていて、獣に成り下がつたような、真っ黒な怪物。

そして、鈴音はある」とを思い出した。

(そういうえば、アイツがなんか言つてた…咎人とかつて…)

言葉だけ聞いても、チンパンカンパンだつた。

（やがてやめなーーー！）と叫んだときの私の心は、さうしたのである

ビクッ
！！

鈴音は心臓が止まるかと思つた。

誰かの悲鳴。向こうから聞こえた。

(えー? なに、 今 の 声! ?)

鈴音は思ひ思ひ回の廻に迷ひてみた。

ある裏路地。

そこを鈴音は覗き込む。そこへ、真っ黒なコートを着た男がいた。

「…処理完了しました。」

共夜ではない。無機質な声。そこにはなんの感情もこもっていない。
どうやら電話をしてくるようだ。

「…どうしますか?これから答人を増やせばいいでしょうか?」

聞いたことのある言葉。

咎人。

増やす？処理ができた？

いつたい何のことだ？と鈴音は考えていた。

そして見てしまった。

全身グチャグチャにされた、血まみれの死体を。そこにいる黒い化け物を。

肉片が建物に飛散して付着しており、目は見開かれている。

腸がぶちまけられ、食い荒らされている無惨な死体。グチャグチャと音を立ててその化け物は肉を食う。

「あ…ああ…」

声を出してしまった。

「！？」

そこにいた男が鈴音の存在に気づく。

「ちつ……見られてましたか……」

そして、そこにいた化け物の一匹に、男がある指示を出す。

「殺せ」

次の瞬間……

「ヴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

化け物が襲いかかってきた。

「ツツー！」

鈴音は動けなかつた。

「ウゴケ！　ウゴケ！　…」

頭から声が響く。

だが動けない。

「あ…ああ…」

一ウゴケ！！

足に感覚がなくなつたようだ。

一ウゴカナケレバー

死

「ああああああああああああああああああああ！」

鈴音は悲鳴を上げながら走る。

後ろは見ない。見れば死ぬ。

走る。走る。走る。

後ろから、うなづき声が聞こえる。

それでも見ずに鈴音は走った。

「おひ、ほんとひで見られてしまつとは。」

そして男は携帯電話を取り出す。

(「ひととせ早急に隊長に知らせなければ……」)

プルルルル、と通信音が鳴り響く。

そして…

ドガアー！！

男は殴られた。

(なつ…！？)

そして、襲いかかってきた奴は倒れた男を3発ほど殴りつけ、気絶させた。

その男は、口元に線香をくわえていた。

「ちつ、予想通りだぜくそが…」

男はいつきながら独り言を言つ。

（アッシュが行つた方向は…）

そして、共夜は見つける。

鈴音の買ひ込んだ食材が、道筋通りに落ちてあるのを。

「ちつ…」

共夜は走る。

「めんべくせえなあ…」

そして、足音とともに、共夜は闇に消える。

闇（後書き）

挿し絵書いじつと思ひつ。

キャラのイメージもぢゃんとある。

でも最大の欠点が俺にはある。

絵心なんてなにもない。

チクショオオオオオオオオオオオオオオ！！

闇の帝王

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」
「…」

鈴音は走っていた。

もうあたりはすっかり暗くなっている。

しかもここは人通りのない裏路地。

助けを呼べる状況ではなかつた。

そんななか、鈴音はあるものを見つける。

「・・・・学校・・・・」

とある学校を見つけた。

どこかに隠れたり、何かしら化け物を対処するによい環境。

鈴音はそう考えた。

(とつ・・・あえず・・・中に・・・ーー)

化け物が背後から迫り来る。

鈴音はテニスをしているため、瞬発力とそれを維持する持久力を兼ねそろえている。

だがそんな鈴音のペースに軽々と化け物はついてくる。

体力も限界に近い。

校舎へのドアに向かつて走り、そのドアについた。

運がいい。鍵が開いていた。

ドアが開く。

勢いよくドアの向こうに滑り込み、すぐさま鍵を閉める。

力チヤ。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

鈴音は安心した。

(これまで・・・もう・・・)

化け物は入つてこない。

そう安心しきつていた・・・

バリィイイイン！！

「キヤアアアアアアアアアアッッ！－」

ドアについていたガラスが砕け散り、ドアが叩き壊された。

ガラスの破片と、ドアとの衝突で、あちこちに痣と切り傷が付いていた。

(あつ・・・つつ・・・！－)

痛い。体中が悲鳴をあげた。

鈴音は恐怖に支配された。

頭がこの3文字に支配された。

鈴音は傷ついた体を起こして、また走り出す。

(誰か・・・! !)

鈴音は懇願した。

(誰か・・・助けて・・・・!)

だがそんなことを祈つても、誰も来てはくれない。

逃げるしかない。

生き残るために。

廊下を走る鈴音。

「」は小学校「」、壁にかわい「」、「廊下を走らないでください」と書いてある。

それを見て鈴音は悪態を心の中でつく。

鈴音の足音がカンカンと学校の中で響く。

その足音を聞き、化け物は獲物を嘲笑つかのよつて口元を緩めた。

鈴音は校舎を出た。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

(たす・・・かつ・・・た・・・?)

そして、学校の外に出ようと思つた。

(逃げ・・・ない・・・ヒ・・・つ・・・)

バリィイイイイインーー!

「ヴォオオオオオオオオオオオオオオオオーー!」

叫び声。上から聞こえる。

・・・化け物が、校舎の窓を割つて、自分めがけて降りてくる。

「ツツツ！－」

とつぞに横に飛び退く。

バゴォ！－

化け物が腕を振り下ろし、地面が深く深く抉れていた。

(はや・・・く、外・・・に・・・)

だが・・・・・

校門を見た鈴音は、絶望した。

「・・・え・・・?」

鈴音は頭の中が真っ白になつた。

・・・校門の向こう側で、あるものを見た・・・

黒いコートの男の集団。

化け物が、7・8匹いる。

そして、そいつらは自分の方向を見た・・・

「標的発見。」

ある男が・・・化け物に・・・ある指令を出す。

「殺せ。

」

こつちに来る。

そしてそれに呼応するかのように、鈴音の近くにいた化け物も鈴音に襲いかかつた。

悲鳴をあげ、鈴音は校舎と切り離された体育館に逃げ込んだ。

そこにはなにもない。

なにも彼女を助けるものはない。

だが、本能がそこに逃げろと叫ぶ。

必死に走つて、鈴音は、鉄製の重い体育館の扉を開ける。

そして閉める。

ガーン、ガーン！―と音が響く。

どうやらこの体育館の扉を破ることはできないようだ。

(どう・すればいいの・・・?)

しかし、今の状況で、助かつた、と安堵する彼女がいた。

だが・・・安堵するのはまだ早かった。

バキイ！

なにかが割れた音。

そして・・・

「鬼」ひには終わりだぜえ？子猫ひやん？

黒マークの男。そして・・・

化け物が入ってきた。

体育館にも窓はある。

それを化け物が叩き割つて入ってくるのも、考えれば当たり前のこ
とだった。

だが、鈴音はその音が聞こえたとき、もう諦めた。

(私・・・)

思いたくもないこと。しかしそれが現実だった。

(・・・死ぬの・・・?)

化け物が鈴音に向かつて迫り来る。

よだれをだらだらと垂らして鈴音（獲物）を思つ存分食らいついつとした。

ある人物が彼女の脳裏をよぎる。

(・・・お父さん・・・)

鈴音の唯一の肉親。

母は生まれたとき亡くなつて、叔父や叔母もいない。

大好きだった父は、よく出張に出かけ、鈴音と遊んでやれないことを悔やんでいた。

そして再開できると思っていた日・・・

彼は飛行機事故で行方不明となつた。

鈴音は生きていると信じていたかつた。

また、顔を出して会いに来てくれる。

また遊んでくれる。

・・・そんな思いを胸に秘めていた。

走馬燈。

それが彼女の頭に駆け巡る。

(・・・萌・・・)

最後に思い出すのは、彼女の親友。

(「めんね・・・約束・・・破つちやつて・・・」)

化け物の牙が、鈴音を切り裂こうとした。

斬
！
！

ある音が響く。

肉が切られる音。

だが・・・鈴音はなんの痛みも感じなかつた。

(・・・え?)

鈴音は思わず覗じていた田舎を、ゆっくりと開ける。

「つたくよお・・・探したぜ?田舎無くなつちまつもんだから町中
駆け回つちまつたじやねえか。」

セイにいたのは・・・

高ご声。黒い刀マー。そして・・・赤く光る刀。

ふとある香りが漂つ。

・・・線香の香り。

「生れてつか?おい。」

・・・霜月 共夜。

「あ・・・え・・・?」

未だに状況が理解できていない鈴音。

あのとき見た赤い刀。

あのとき見た黒いコード。

あのとき見た・・・化け物の亡骸。

亡骸はすぐに、なにかに溶けたように消えていった。

「・・・怖かつたか?」

共夜が優しく鈴音に尋ねる。

・・・鈴音は首を縦に振ることしかできなかつた。

「・・・そうか・・・」

そして共夜は化け物と、黒コートの集団を見る。

「誰だテメエー？その黒コート……まさか『ケロベロス』か！？」

・・・『ケロベロス』？

ケロベロスとは、あの地獄の番犬のことだらうか・・・？

・・・なにかの組織名？

だが、鈴音にはなにも思い当たらない。

「・・・だつたら？」

共夜はそれがどうした？とも言つぱつに男に返事をする。

「・・・構わねえさ・・・」

男は化け物に命令する。

「殺せーーー！」

「ヴォオオオオオオオオオオオオオオオーーー！」

化け物の叫び声。

「・・・めんぢくせ・・・」

そうつづぶやき、共夜は線香をペッ、とどこかに吐き捨てて、刀を肩に乗せる。

「ツツ……ダメ……」

鈴音は叫んだ。

ダメだ。この数ではいくらなんでも……

共夜は刀を鞘に収めた。

そして……

時が止まつたよひな氣がした。

ドカー...といつ頃ととむと、共夜の姿が消える。

グシャア！－と、共夜が立っていた足下がつぶれる。

ブオ！－

共夜が化け物の後ろに現れた。

・・・化け物は動きが止まつた。

そして・・・

「『瞬』の神速・・・」

刀がいつの間にか鞘から抜き取られている。

共夜はその刀身を鞘に收める。

「・・・『闇鳴』（やみなり）・・・」

カチン。

音がした。そして・・・

ブシャアー！！

化け物が真つ一つになつた。

「…？」

鈴音は驚愕する。

鈴音だけではない。黒コートの集団も同じだった。

「テ・・・テメエ・・・いま、いつたい・・・？」

その問いに、共夜はめんぐくをかみに答へる。

「走った。斬った。はい、お終い。」

バカにしたような口調に、黒コートの一人は憤る。

「クソがあアアアアー！ナメてんじゃねえぞおおおーー！」

男が懐からあるものを出す。

黒く光り、ズシリと重たそうなそれは、今まで鈴音が見たことのないものだった。

「共夜ーー！」

・・・拳銃。

名前を叫ぶ鈴音。

だが、間に合わなかつた。

バーン！！という乾いた音。

鉛の玉が、共夜めがけて発射された。

なにかの音が聞こえた。

ヴ・・・ン・・・

共夜から。

そして、鈴音は共夜を見る。

共夜が銃弾に当たったと思った瞬間・・・

共夜は煙のように霧散した・・・

そして · · ·

「おいおい、物騒なもん出すなよ。」

なにもなかつたかのように共夜は黒マークに歩み寄る。

「う・・・うあ・・・」

黒コートの男は目を見開いていた。

化け物を見たかのように。

そして

「アンアンバーン！！と音が響く。

だが、共夜はまた霧のよつに霧散し、また元通りの姿に戻る。

「種明かししてほしいかあ？」

共夜がふざけた口調で男に尋ねる。

そして、共夜は続けていった。

「ただ極端に速く動いただけだ、ボケ。」

そして共夜は、男をガン！…と鞄で殴りつけた。

男はそのままピクピク、と震え、そのまま気絶した。

そして、共夜は残った黒コートたちを見る。

黒マークは、蛇にからまれた蛙のようになくなってしまった。そして動かない。

「わあ、エーハルヘ……まだやるか……?」

黒コードたちは怯えきつた目で其夜を見て・・・

「ノーブル・アーチャーの魔力を使いつぶす……」

バ
ア
ン
！
！

1人が銃弾を共夜に向けて発射する。

今度は其夜は煙のよう霧散しなかつた。

軽く頭を傾けて、軽々と弾丸を避ける。

バサツ

共夜の顔を覆っていたフードがとれる。

共夜の顔を見た黒コートの1人が、スッと血の気が無くなつた。

「・・・紺・・・色の・・・髪・・・?」

そして、共夜の背中を見た。

鈴音は今まで共夜の背中を見たことはなかつたが、今は見えた。

大きく「〇」と書かれている。

「…………番隊…………隊…………長…………？」

そして、皆が目をカツ、と見開いた。

「…………霜月…………共夜…………？」

共夜は一瞬、と口元を緩める。

「なん…………で…………」

男は震えた声で……叫ぶ。

「なんで『闇の帝王』（ダークエンペラー）がここにいたんだああああああああーっ。」

共夜は鞄を構える。

そして優しく男の問いに回答した。

「仕事だからに決まつてんだる、ボケが。

」

ガツ！…と黒コートを殴り倒した。

闇の世界を歩むるもの（漫畫卷）

共夜

「鈴音 - ？」

鈴音

「なに?」

共夜

「作者がのたれ死んでんぞ?」

鈴音

「ああ、それ上條の仕業。」

共夜

「・・・kyouyouなにしたの?」

鈴音

「またとあるのまゝで私たちの宣伝しようとして、『しつけ...』と一蹴されて上條に半殺しこれられたみたい。」

共夜

「・・・・・・・」

闇の世界を生むるもの

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

沈黙。

自分の前にいるものは、いつたい何者なのか？

・・・「闇の帝王」（ダークエンペラー）？

・・・ケロベロス？

とにかく鈴音の知る世界ではない。

なにも分からず、混乱していた鈴音の前で、共夜は一蹴した黒マー
トたちをなにやら「ソソゴソ」と物色し始めた。

そこから取り出したのは、まず・・・黒マークたちの・・・携帯電
話？

でも、あんな機種見たこともない。

そして、何かしらの紙。

共夜はそれを見て、うえ、と呻く。

「いじで咎人と・・・咎鬼とがびとを生産せよ・・・なあ・・・」

また出た。

咎人。そして、今度は咎鬼。

「え？え？なに、咎人つて？それに・・・咎・・・『鬼』・・・？」

「・・・あとで、別の場所に移つてから説明するよ。」

そして、共夜はいきなり黒コートたちから押収した携帯電話から、ある電話番号を見て、ふーん、と1人納得する。

「・・・直接隊長（あのクソ野郎）につながるわけじやねえか・・・まあ、こんな雑魚ならそれも当たり前か・・・」

そうこうで、こきなり発信ボタンを押した。

「えつー…ちよつー…？」

こんな感じで電話すれば、場所がばれてしまつんじゃ……？
だが、そんなことしちゃなるの？ともかくたゞに鼻歌交じりで
電話した。

「おこ、報告はまだか！？」

怒鳴る男は、黒マントに身を包んでいた。

「ま、それが……どうやら娘へ戻してこねやうで」

て・・・

「早くするよう連絡しろ！－あと5分だ！－それまでにしなければ・
・－！」

男がいたのは、ある廃ビルの2階。

そこで隊員に指示を出していたわけだが・・・

隊員からの連絡が途絶えていた。

(早く・・・！－)

男は焦っていた。

(早く・・・あと5分以内に処理しなければ・・・－！)

「しなわや、ひつねのうて？」

ビクン...。しかし、男は後ろを見る。

そこには・・・ある男が立っていた。

長い白髪・・・田は青色・・・

そしてなにより・・・そこにはいるだけを感じる、威圧感^{ブレッシャー}・・・

「隊・・・長・・・！」

「どうしたの？もつすぐ時間だよ？どうしてたかが小娘1匹処理できなかなあ？」

「・・・あの・・・」

「どうして処理できないかなあ？」

その瞬間、空気が、重力がズン！と重くなつたよつに感じる。

なぜか、立てなくなつた。

どうやら、そこにはいるもう一人の男もさうらしい。

「どうして？咎人を使えば簡単に、人間なんて処理できるでしょう

？なの」「いやしあれができなこののかなあ？」

「お・・・・おやぢへ・・・」

「おやぢへ・・・」

「ケロ・・・ベロ・・・ス・・・ガ・・・かか・・・わつて・・・」
の・・・報・・告・・・が・・・」

セツコヒト、隊長と呼ばれた男は、口元をゆがめる

その瞬間、馬を押しつぶやうとしていた空氣がピタリ、とやんだ。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

「やつぱり来たねえ・?」

隊長は笑つてゐる。

「」でも見た」とがない、邪悪な笑みを浮かべてゐる。

それを見て、そこにいた2人はゾッとした。

ブゥーン！－ブゥーン！－

携帯が鳴つた。

「隊長！－！」

「・・・なに？」

「報告が！－小娘を処理したようです！－！」

そして、男は通信ボタンをピッ、と押した。

『さつああーい?』——んぱーんわあー?クソ野郎どものみなをーん?
?』

・・・隊員からではなかつた。

「の姫は・・・誰だ・・・?

「お・・・おえは・・・いつたい・・・?」

そんな声を出すと、向こうは笑い出した。

『ハハツ、そうビビんなつてー?処理ならしたぜー?』

「・・・処理?」

そうか、別の隊のものだったのか、と男は安心した。

『テメエらクソ部隊のやつらを今ボツコボコにしたといでやーつ。料金もえますかね?マジに田覚めさせなうなら追加50000円ね。』

男は真っ青になった。

・・・ひの・・・部隊が・・・全滅・・・?

そんな男の沈黙もかまわず、男は鼻歌交じりで続ける。

『クソ隊長に言つといつくれる?』

そして、鼻歌をやめて、殺氣混じりの声で口づけた。

『テメエにお得な地獄行きの旅行をプレゼントしてやる。こまのうちに懲悔しあげカス野郎。』

ブツッ。

「画面」、「通信終了」と出た。

「……どう?処理できてた?」

「……あ……ああ……」

「……できてなかつたんだね?」

そして、ゆうりと隊長の体が動く。

「……もう、時間過ぎやつた。」

2人の顔に、絶望が浮かぶ。

「ま、待ってください!—ま、まだ……」

ブチイー！ブシャアーー！

・・・なにかがちぎれる音がした。

・・・赤い液体が流れ出でくる。

そして、その音とともに、男の体が倒れる。

・・・首なしの状態で。

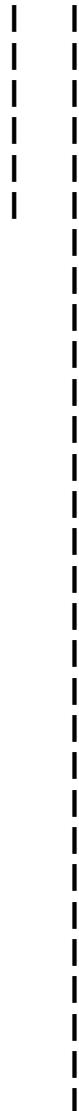
「ひつ、ヒィイイイイイイイイイイイイイイイイーーーー！」

そして、もう一人も逃げようとした。

だが・・・末路は先ほどの男と同じだった。

口元に付いた血をペロリとなめて、隊長は笑う。

「あはあ。」



ピッ、と通信終了のボタンを押す共夜。

「さて・・・と・・・」

共夜は鈴音の顔を見た。

「ねえ・・・」

「ん?」

「・・・大丈夫なの・・・? あんなことして・・・」

鈴音は顔が真っ青だつた

明らかに先ほどの電話は挑発だった。

相手が黙っているはずがない。

その問いに、共夜は笑つて答えた。

「大丈夫だ。お前の身の安全ならなんとかできるさ。」

そういうて、共夜は、自分の携帯電話を取りだした。

この機種も、見たことがない。

そして、誰かと通信する。

「あ、もしもし。総隊長？ ああ、はいはい。ちょい保護してほしいやつがいんだ。・・・うんうん。そう。あのクソッタレドもも動いてる。駆除した方がいいな。・・・はいはい、わかったわかった、以後気をつけるって。本部への門、開いてもいい？ ・・・オッケー、わかった。」

携帯をパクン、と閉じて、ポケットにしまった。

共夜は右手を出して、空間を指でなぞった。

すると・・・

バクン！！

音を立てて、指でなぞった空間が裂けた。

もはや鈴音は驚愕の声すら出せない。

そして・・・

「ほれ、早く行くぞ？」

私の手をつかんで、空間の裂け目に入ろうとした。

「ふふーー。」

思わず素つ頬狂な声を出してしまつ鈴音。

そしてそのまま共夜とともに入つていつてしまつた。

『心術士』（オーラ）

空間の裂け目にに入った鈴音は、驚愕した。

そこにある空間は、黒、黒、黒、ただひたすらに黒。

そこには温もりなど無い、冷たい空間。

少しでも氣を抜けば、その間に溶けてしまいそうだった。

鈴音は怖かった。

（・・・怖い・・・）

黒から連想するのは、先ほど自分を襲ってきた化け物たち。

恐怖が、鈴音の理性を徐々に奪つ。

（・・・温かい・・・）

ただただ暗いその空間の中、共夜の手のひらだけが、その温もりを伝えてきた。

普段の鈴音なら、絶対とらないであろう行動に、鈴音は移った。

共夜の握っている手から、腕へと移る。

ガシッ！…と強くつかみ、共夜はほえ…？と素つ頬狂な声を上げて叫ぶ。

「ちよつ、おま、なこして…」

だが共夜は怒鳴る直前になつて、鈴音の心境を察した。

「・・・・・」

鈴音を眺める。

・・・眺めたくなつてぐる・・・

・・・ひどく懐かしい思い出・・・大切な思い出と、鈴音がダブつ
て見えた。

「ツツーーー」

一瞬ノイズが走った気がした。

共夜の腕に捕まっているのは、鈴音ではない。

長い黒髪。透き通る白い肌。

・・・儀式装束を着た、共夜の大切な人。

「・・・し・・・すく・・・?」

だが、その幻影はすぐに消え去る。

そこにいるのは、鈴音。

「・・・?しずくつて・・・?」

その声に、ビクッとする共夜。

・・・共夜は動かしていた足を、いつの間にか止めていた。

共夜が、なにか悲しげな顔をした。

だがその表情を無理矢理押し殺して、引きつった笑みを浮かべる。

「・・・なんでもない・・・先行くぞ。」

そしてまた足を動かした。

しばらく走っていると、一筋の光が見えてきた。

温かい光。

「ほつ、ど。」

バン！-と頭を立て、跳躍する共夜。

だが・・・跳躍する距離が半端なかつた。

だいたい50メートルは跳んだ。

「わわわわわーー！」

鈴音も共夜に引っ張られて、空を飛んでいた。

そして、鈴音たちは光の中に入った。

バグンーー！

また空間が割れる。

そして割れた空間に入つていった。

まばゆいばかりの光。

そして・・・

バガーン!!

派手な音を立てて壁と衝突する共夜。

「おぐおーっ」

「 ももももももももーー?」

鈴音も共夜がぶつかつた壁に衝突しかけたが・・・

バゴンーー!

「 あんぎゃあああああーー!」

壁と鈴音が衝突する際、共夜が間に挟まつていて、クッションの役割をしたため、鈴音は怪我を負うことなく無事に着地した。

・・・共夜はもうに激突した上、衝撃を鈴音の代わりにすべて受けたので、無様に地面に転がつたが。

「 むーかおおおおーー! 鼻があアアアアーー?」

激痛で悲鳴をあげる共夜。

だが、共夜の悲鳴よりもまず、鈴音は、あるものが田に入った。

「あひやあー、もろに鼻ぶつけたわね、共夜。」

そこにいたのは、音撫 女神。

「まず忠告つてもんをしろ！…くそつたれがー！メチャクチャいで
えんだぞこれ！？」

「ゲート開いただけでも感謝しなさい」

「テメヒ…ふざせんなよ」のババア…」

「んだとおー…もつかい言つてみる」のクソガキ…」

ギヤーギヤーと2人が口論している間、鈴音はポカンとしている。

「なんなのよ・・・ホント」・・・

共夜と女神はハツとして鈴音を見る。

自分は普通の学園生活を送っていたはずだった。

普通の生活。普通の友人。普通の世界。

なのに田の前に広がるのよ、わけのわからない線香中毒者と、女子
高校生。

もはや鈴音は限界だった。

「なんなの」「……なんで化け物に襲われるの!? あんたたち何者
なの! ?あの黒マークはなに! ?わけわかんないのよ! ! もつこや
! !」

鈴音は怒鳴った。

鈴音の気持ち。

本当にわけがわからない。こんなことで巻き込まれる覚えもない。

何で自分がこんな目に遭うのか分からない。

すべてが理解できない。

・・・もつこやだ・・・

もつこんなのいやだ・・・

夢なら覚めてほしい・・・

だが、夢ではない。

鈴音は涙を流す。

・・・じつはこうなったの・・・

「もっ・・・いや・・・」

絞り出すような、精一杯の声。

「・・・助けてよ・・・誰か・・・」

彼女のSOS。

誰でもいい。答えてほしい。

ポン。

共夜は鈴音の頭に手を置いた。

「・・・安心しろ・・・」

そして共夜は鈴音に言い聞かせる。

「お前を誰も傷つけやしねえ。俺がいる・・・」「

そして、鈴音の目を見つめる。

「・・・俺を・・・信じてくんねえか?」「

・・・共夜の目を見る鈴音。

深く青い瞳孔の目。

そこには一瞬の曇りもない。

「誰が味方かなんかなんてわからないかもしけない・・・でも、俺

は信じてくれねえか・・・

「・・・・・・・・

鈴音は黙つた。そして・・・

「・・・（ハク）」

頷く鈴音。

その様子を見て、共夜は自然と笑みをこぼす。

「・・・女神、じゃあ、先行くぞ。」

「・・・わかった・・・

そして、共夜たちは女神をあとにした。

また出てきた、ケロベロス。

「・・・『地獄ノ番犬』（ケロベロス）本部だ・・・」

そして、共夜は答える。

鈴音は尋ねてくる。

「・・・『』、どこのの・・・？」

「・・・『地獄ノ番犬』（ケロベロス）って、なに？」

少しの間、共夜は沈黙して、答える。

「・・・『心術士』（オーラ）を管理する組織・・・世界のパワー
バランスを整える、管理者だ。」

・・・『心術士』（オーラ）？

また知らない単語だ。

それを察してか、共夜が説明する。

「『心術士』（オーラ）つてのは・・・」

「簡単に言ひと、自分の感情を武器にして戦つ術士のことだ。」

『地獄ノ番犬』（ケロベロス）（前書き）

k y o u y a

「共夜アアアアア…！」

共夜

「でつかい声出すな…！何だ、急に…！」

k y o u y a

「もしかしたら挿絵ができるかもしない…！」

共夜

「はあ？」

k y o u y a

「絵心なしの俺に、ある友人が俺の小説のキャラ描きたいって言つてくれました…！もしかしたら許可もらえば出すことができるかも…！」

「！」

共夜

「…でも人が見に来てくれなきゃ意味なくね？」

k y o u y a

（前書き）

「・・・・・大丈夫・・・とりあえず俺が満足するから。」

共夜

「・・・・・」

k y o u y a

「あと、この話はフィクションです。実際の話ではなく、仮想の話です。あんま鵜呑みにしないでね。科学的知識もあやふやだから自分でちゃんと調べてください。」

『地獄ノ番犬』（ケロベロス）

共夜たちは、共夜が衝突した、ある建物の中に入つていつた。

共夜は鈴音に、白く長い廊下を歩きながら説明をしていく。

・・・共夜に説明されたことを、もう一度確認してみることにした。

まず、『心術士』（オーラ）といふ、自分の感情を武器にして戦うことのできる者がいるといふことだ。

そして、その『心術士』（オーラ）を管理するべく生まれたのが、『地獄ノ番犬』（ケロベロス）といふことらしい・・・

・・・にわかに信じられないことだが、本当のことのようだ。

鈴音は見た。

共夜の超人的な身体能力を。

50メートルも跳躍できる人間など見たこともないし、銃弾が当たつたかと思えば、霧散する人間も見たことがない。

・・・鈴音は、改めて、自分が非日常の世界に来てしまったことを実感する。

「説明、続けるぞ。」

共夜が鈴音に言つ。

「『心術士』（オーラ）っていうのは・・・もつともポピュラーなもので言うと・・・魔術師とか、呪術師とか・・・この世界の日本で言う陰陽道とかがそうだ。自分の感情を、現実に干渉する1つの力に変えて、戦うことのできる者・・・本来なら、誰にでもある力なんだ。」

え?と鈴音は声を上げる。

誰にでも・・・ある力・・・?

「・・・例えば、火事場の馬鹿力とかいう言葉がある。人間が危険な状態に陥ったときに、普段よりも強い力を出す・・・このとき、科学的にはホルモンが働いて、血液を普段よりも多く運んで、酸素の供給率が上がり・・・とかなんとか言われるけど、実際はそうじゃない。」

「・・・ホルモンが関係してるんじゃないの？」

「いや、多少関係しているが、でかいのは心理的な力・・・精神が要因する。」

そして、共夜はさらに続けて言つ。

「精神つてのは、実は身体的なエネルギーの1つを担う役割を持つてる。普段出すその力は本当の力の1パーセント未満の力だ。そのエネルギーは、ある心理的状況に極端に陥ると、発動する。よくあるだろ？超能力とかがそのいい例だ。・・・ま、その場合でも実際の5パーセントなんだがな？」

「・・・そんなものが・・・あるの・・・？」

「・・・発現するための力はある・・・」

「・・・それって・・・?」

「普通の人間じゃ感知できない力。世界じゃ靈氣だの、妖氣と言わ
れているが、俺らは『魂氣』（こんき）と呼んでる。力が発現する
かしないかは、この魂氣の要因が大きい。この力は個人によつて大
きさも感触もなにもかも違う。ある程度、才能つてのがいるな。こ
の魂氣の力で、どれだけの感情とシンクロして、どれだけ現世を歪
められるか・・・そこで『心術士』（オーラ）になるかどうかが分
かる。」

「・・・『魂氣』（こんき）・・・『心術士』（オーラ）・・・」

「とりあえず、『心術士』（オーラ）という者が存在することは、
信じてくれるか?」

・・・「クリ、と頷く鈴音。

「……で、その『心術士』（オーラ）には、大きく分けて2種類の者がいる。」

「……2種類？」

そう、と共夜は相づちを打つ。

「1つは、『聖人』（レム）。光の心を持つ、本来あるべき『心術士』（オーラ）の姿。」

「『聖人』（レム）……」

「そして……もう一つが……」

続けて共夜は言おうとした。

「じゃあ、あなたがお母さんのお嫁さんにならう。

・・・・・共夜の腹から泣き声が聞こえる。

モヒ・・・・・

ドシャアアアーー！

いきなり共夜が倒れた。

「えー？」

鈴音は驚いた。

いきなり倒れると、さすがに誰も思わない。

「・・・あー・・・」

共夜が蚊の鳴くような声で話す。

「ちゅ、ぢりしたのー? 共夜ー?」

鈴音は共夜を呼ぶが、声は届いていない。

よく見ると共夜は白目をむいている。

もしかしてなにか反動でも起ったのか、それとも怪我をしていたのか・・・

鈴音は恐怖した。

(誰か・・・)

そして、鈴音はあらいろを見ていた。

すると、長い廊下の向こうから、2人の人がやつてくるのを見つける。

そして、その2人は共夜たちを見ると、一いち方に走つてやってきた。

1人は女性。

長い髪は金に近い茶髪で、すゞく白い肌をしている。

着ている服は、白を強調する色合いの服。

スカートをしていて、色は紺色の生地だった。

・・・なにより目を引くのは、その胸。

(でかつ！？)

鈴音のものより明らかに大きい。

・・・そんなことはどうでもいいとして・・・

そして、もう1人は男。

・・・」ひらも女性と同じような色の、短い髪。

・・・顔は小さく、10人中10人の女性がイケメンと呼ぶであろう、クールな表情。

白のワイシャツの下に、黒いズボン。

「どうしたの？」

女性のほうが話しかけてきた。

そして、共夜を見るなり・・・

「・・・共夜・・・？」

女のは、共夜のことを知つてゐるようだつた。

「あの・・・急に共夜が倒れちゃつて・・・」

せりこつた鈴音に対し、男はとんでもないことを発言する。

「こつもの」とだ、ほつとけ。すぐ起きるだろ。」

・・・は？

なんだらう、この男の人。

表情だけじゃなくて、中身も冷たい。

「ちよつと、そんな」と言つもんじやないわよ！？魅守！－！」の子
共夜のことはまだなにも知らないんだから！－！」

女の人気が、魅守・・・といふ名前なのだらう・・・その男の人を怒
鳴る。

だが・・・

「うつせえ、いいだろ別に。こんなんで死ぬかよこいつが。それに
こいつがどう思おうが俺には関係ない。」

すん」い淡泊な反応。

・・・あまりの人に好感は持てない・・・鈴音は密かにしきつ
思った。

「何でそんな」と呟うんですかー?急に倒れた人をなんでそんな風
に冷たく突き放すんですかー?おかしいですよそんなのー!ー」

・・・ザザザ・・・

「「ツツー?」」

鈴音が・・・鈴音じゃない「誰か」に変わった・・・ダブったよう
に見えた・・・

そして・・・鈴音の代わりにいたのは・・・

「・・・雪・・・?」

そして、次の瞬間、鈴音はもとの鈴音に戻った。

鈴音はキヨトンとする。

「・・・雲・・・?」

そして、2人は驚愕していた・・・

(・・・なんだ?今のは・・・)

魅守と、そこにいた女の人も、同じことを考える。

が・・・

「そこまで共夜を突き放すこともないでしょー?なんとかしてください
さよー!」

・・・鈴音が言い寄つてくる。

言い寄つてくる鈴音が、魅守と女の人には、「ある人物」にダブつて見える。

「・・・ちつ・・・」

舌打ちをする魅守。そして・・・

「・・・わかつた・・・起こして食堂に連れてていきやいいんだろ・・・
・?」

・・・え?

「・・・食堂?」

鈴音はポカンとして魅守に尋ねる。

そ、と言つて女の人は答える。

「倒れる前に、変な面見こえなかつた?」

やつられて鈴音は思い出す。

「・・・・急に、じれもぬくの、ついて・・・」

そして、その女の人の言葉は、鈴音を畳然とさせる。

鈴音は呆然とする。

・・・・・・・・・・・・

「ただ単にそいつ、お腹がすいただけ。その音はお腹の音よ。」

そんな鈴音に構つこともなく、続けて説明する女人。

「だから、なにか腹一杯食べさせてあげればすぐ元気になるんだけど…」

けど？

その語尾に少し不安を募らせる鈴音。

「そいつ、なにか食べるまで起き上がれないのよ。極度の空腹に陥つたら、最後の力を振り絞つて動くけどね。」

・・・・・・・・・・

鈴音は共夜をキッ…とこらむ。

そんなことで私は心配してしまったのか？なんだか急に恥ずかしくなると同時に共夜に対して怒りがわいてきた。

だが・・・

(・・・あれ?)

・・・ふと、鈴音は冷静になつて考えてみた。

もしかして・・・対処するには、放つておくか、連れて行くかのどちらかしかないの・・・?

そんなことを考へた鈴音だつたが・・・

「でも、裏技があるのよね」

・・・裏技?

「そんなのあるんですか?」

いつみたいなにをするのだろう。

そんなことを考えていると、その女の人は共夜のところに近づき、
そして・・・

「えいっ」

ざわむ。

いきなり共夜に自分の胸を押しつけた。

なあああああああああつー?

鈴音は絶叫した。

そして、その様子を見て、魅守はやれやれ、とこいつのような顔をしている。

(えー? なに、この人いつたいなにして・・・!?)

・・・まさか、いじんなことして、共夜は興奮して起き上がるのか・・・?

鈴音は考えたくなかつた。

だがもしやうだとしたら・・・

(・・・最低・・・)

共夜の好感度が一気にダウンする。

だが、その考えは、「いい意味」(?)で裏切られる」ととなる。

死んだように倒れていた共夜が突然動き出した。

ゾワゾワゾワゾワアツツー！

いきなり共夜が震えだした。

そして・・・・・・

バーン！！

いきなり跳ね飛ぶよつに起き上がつて、

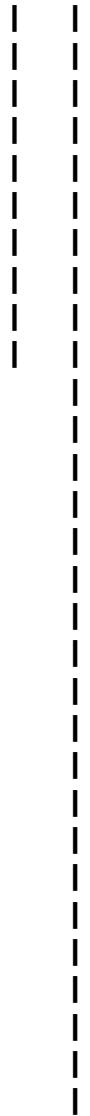
絶叫しながらダッシュで逃げた。

その様子を見て、鈴音はポカーンとしていた。

共夜の様子を見て、その女の人はクスクスと笑っている。

「あいかわらずつがな子ねえ？共夜つて。」

そんなことを言う女人の人に対して、魅守はこの変態野郎、とボソリとつぶやいた。



この『地獄ノ番犬』（ケロベロス）本部には、食堂が存在する。

こここの食堂は今日もいろんな人がいる。

ガヤガヤとお互いに話し合う人たち。

そこにいる人は、ゆうに1000を超えている。

そんななか・・・

・・・・・ガガガガガガガガガガガガ・・・・・

なにか音がする。

それは、ある扉から聞こえてきた。

その音を聞き、身構える集団。

• • • • "P" • • •

さらに大きくなつていく音。

次の瞬間

バゴオオオオオオオオオオ！！

絶叫とともに共夜がそこに入ってきた。

扉は共夜によつて砕け散り、扉付近のものは、共夜に容赦なくはね飛ばされた。

なんだなんだ？ いつたいどうした？

そんなことを考へる集団。

だがそんなことを考へる暇もなく、共夜は食堂内を激走する。

バカーン！ ドガーン！ ダパーン！ …と破壊音がこだまする。

それに巻き込まれた者は、あとで救急治療室のお世話をこなつた。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

鈴音たちは共夜を追いかけていた。

よほど嫌だったのだろうか。全速力で走つていふことが分かるくらい、床や壁に足跡が深くめり込んでいる。

「…………なんなのよ…………アイツ…………！」

「なんで私をいやがるかなあ？共夜。」

「…………過去にアイツを寝込みで襲いかかつたやつがなにいつてんだ……」

…………の女人もあまり好感は持てそうにない………… 鈴音は密かに思ひ。

そして、曲がり角に差し掛かると、一つのぶち破られた扉を見た。
そしてその方向に向かっていくと…………

ドパアアアアアン！ガシャアアアアン！

凄まじい破壊音が響いてくる。

「　「　「　・　・　・　・　・　・　・　」

3人は沈黙する。

「　・　・　・　おまえのせいだからな　・　・　・　」

魅守は女人にそう言った。

「　ど、ど、ど、す、れ、ば、い、い、ん、で、し、ょ、う、・、・、・、?」

「　・　・　・　・　ち、ち、ち、ち、・　・　・　・　」

舌打ちして食堂の中に入る魅守。

「えー?」

嘘のように静まりかえった食堂。

・・・・・・・・・・・・

シユビバツ！

「おい共夜、お前の好きなマグロ丼ができたぞー。」

そして、破壊音が30秒ほど響いたあと・・・

「だ、大丈夫なんですか？　あの人は？」

あの轟音の中、入っていくつて・・・大丈夫なのか？

鈴音は驚嘆した。

・
・
・
・
・
密かに其夜に失望した鈴音だった。

『地獄ノ番犬』（ケロベロス）（後書き）

前に投稿したのと設定を変えました。

夜（前書き）

やつた――――挿絵できた――――

やっぱ持つべきは親友だね――――

夜

ガツガツムシャムシャバクバクゴクゴクバクバク。

バクバクゴクゴクムシャムシャガツガツ。

・・・2つの食べ物を食いあさる音が響く。

その音が出る方向を見て、鈴音は無表情になってしまった。

・・・食ひ音の原因は、共夜と魅守。

共夜はマグロ丼がもうスープと間違われてもいいくらいに醤油をドバドバかけて食べている。
おかわり20杯目に突入。

魅守は天ぷら丼を、もはやかき氷と間違われそうなくらい塩をかけて食べている。

おかげり19杯目に突入。

お互にこじりみ合つて食いあさる2人。

「むーーー、むままももーーーもまががまみーまーー（なんだテメエ
そんなに塩かけて食いやがつてーー塩分の過剰摂取で死ぬぞバカ！
ーー）」

「むももまがまみまががーーーもまががーーー（トメヒこそなん
だその醤油の海はーー塩分の過剰摂取で死ぬぞバカーーー）」

お互いどりやつて言葉理解してるんだろう。

とつあえず鈴音が言えるのは、2人とも死ぬからやめろバカ、くら
いだとこいつことだ。

・・・お互いに嫌いあつ2人。

はあ、とため息をつく鈴音。

とりあえずあんなもの見てたら食欲が失せるので、離れて食べる鈴音。

先ほどの共夜暴走で、『地獄ノ番犬』（ケロベロス）内の通路は178カ所が損傷。

食堂内は、テーブルが700個中320個が破損。

共夜にひかれて重軽傷を負った人、184名。

なお、今回の暴走を引き起こしたとして、先ほどの女の人がすべて責任をとることになった。

「・・・はあ・・・」

ため息をつく鈴音。

ここにいるのは変人ばかりなのだろうか。

1人氣落ちする鈴音。

そんなとき、トントン、と胸中を叩かれた鈴音。

そして振つ返ると・・・

「はあー」

先ほどの女の人がそこにいた。

「あ・・・」

「わざわざめんね。あんなに暴走するとは思わなかつたから。」

「い、いえいえ、いいんです、いつわざなにも被害受けませんし・
・えーと・・・」

そういえば、名前をまだ聞いてなかつた。

「ああ、まだ血口紹介もしてなかつたわね？私、
吹雪。よひじく。」

名前を教えてくれた刹那。

「で、そつぢは、なんていの・・・？」

「あ、水鏡です。水鏡 鈴音。」

そうじて、自分の名前を教えた鈴音。

すると・・・

「…………」

急に黙ってしまった刹那。

「…………？」

え？と返事する刹那。

「あ、いやいや、なんでもないの。……ちょっと、考え方。」

「？？？」

なんだかよく分からぬ鈴音。

このまま黙っているのもなんだから、鈴音はなにか話しかけようとした。

「刹那君、刹那君、ちょっとといい！？」

後ろにいる誰かに話しかけられた刹那。

その人は男の人だった。

少し長い茶色い髪で、声は高め。

黒い服を着ていて、手になにか石のようなものを大事そうに持つて

いた。

「あら、黒地くろじ、どうしたの？」

刹那が声をかけると、その黒木と呼ばれた男の人はなにか心配そうな声で話しかけてきた。

「さつき、僕の大事な大事な石をテーブルの上に置いといたんだけどさ、トイレ行つてる途中で共夜が暴走するもんだからそこら中食堂がボロボロになつてて、石がどこにも見当たらないんだ！！知らないかい！？僕の石は無事かい！？」

・・・またなにか変な人がやつてきた。

すると刹那は・・・

「ああ、あれのこと？」

と言つて、ある方向を指し示す刹那。

そこには・・・・

粉々になつていた、水晶があつた。

叫びながら石に寄つていいく黒木。

そして、そばに着いた途端、膝をついてうなだれていた。

「・・・なんなんですか？あの人・・・」

「ああ、あいつね？黒地くろぢ石人いしひと。昔むかしから土のことが……中でも

石のことが大好きな、重度の大地フェチ。」

やつぱ変人か。と鈴音は独り言を呟つ。

「私も初めてあつたときびっくりしたわあ、いきなり『石つて見えて舐めたくなるよね?土つていい香りがするよね?』とか言ってくるんだもの。」

・・・まともな人はどこにもいないんだろうか、と思つ鈴音だった。

そうしてまた落ち込む鈴音・・・

もう誰も話しかけないで・・・そう思つていた鈴音だった・・・

「ちょっと失礼してもいいかい？」

そうして話しかけてきたのは、短く黒い髪をした、黒いローブに身を包む男。

もううんざりしていた。

いつた！今度はどこの変人？そつ思つていろと・・・

「えっと、あなたが今回保護を受けることになつた、水鏡 鈴音ち
やん、だよね？」

・・・あれ、意外とまともな人？

「共夜が超特急で知らせてきてね？こっちもいろいろ事情があつて忙しかったから、声かけるのが遅れてしまったんだ。もうしわけない。・・・って、聞いてる？」

・・・鈴音は啞然としていた。

声をかけられて、ハツ！とした鈴音。

「あ、ええと・・・その・・・はい、大丈夫です・・・」

とりあえずなにか返事をしておこうとした鈴音。

「・・・へどうかしたの？」

「あ、いえ、あの・・・さつきから・・・変わった人ばかりがいる

もんだから・・・今度は・・・いつたいどんな・・・ええと・・・
その・・・変わった人なのかなあって・・・あの・・・」

そういふと、男はハハハ、と笑つた。

「ああ、そりだつたの。うちはとにかく変なやつばかりだから、馴染みにくいと思うけど、すまないけど、我慢してくれるかい?」

「あ、あの・・・ホントに・・・すいません・・・」

「いいよ、別に。あ、自己紹介まだだつたね?僕は夜神峰仙よ

・・・前言撤回。まともな人もいるもんだ。

そんなことを考えていた鈴音の耳に、刹那の声が聞こえた。

その瞬間、顔を真っ赤にして、立ち上がり頭を下げる玲音。

え？ 総隊長？ それって、一番偉い人ってこと……？

・・・ 総隊長・・・？

刹那が呆然として言った。

「・・・ 夜神総隊長、なんでこちらに・・・？」

「アーリーリーリー」みんなやつて……そんなお方だとは思つてなくて、ここ・・・ひとつ……本当にすこません……」

「いいっていいって、そういうのは慣れてる。頭あげて。

やつして、ひとつと頭を上げる鎌音。

まだ顔が真っ赤になつてゐる。

とんだ大失態を犯してしまった。

鈴音はそう思った。

そういうことになると、総隊長のまつからじがひに話しかけてきた。

「鈴音ちゃん・・・あの化け物たちを見たかい?」

ピク、と反応する鈴音。

真っ黒な姿。

人のよつた姿をしていて、人間を喰っていた、あの化け物。

「・・・はい・・・」

小さく返事をした鈴音。

「・・・そつか・・・怖かつたかい?」

「・・・・・・・」

鈴音は無言のままだつたが、そのまま首を縦に振る。

「・・・共夜から、どこのへりで説明してもらつた?」

「・・・『心術士』（オーラ）、『地獄ノ番犬』（ケロベロス）、
『聖人』（レム）・・・そんなところです・・・」

「・・・じゃあ、まだ咎人とがびとについては、まだ？」

鈴音は顔を上げる。

咎人とがびと。

先ほどから気になっていた、言葉だった。

「・・・まだです・・・」

「・・・じゃあ、こちから説明する。」

そして、夜神は話し始めた。

「普通、僕たち『心術士』（オーラ）は、誰もが『聖人』（レム）になるんだ。心が清く、光に満ちていれば、自然と誰もが光となる。」

でも、と夜神が言つ。

「イレギュラーな存在もある……といひで鈴音ちゃん、七大罪つて、知つてる？」

「……人間に課された、7つの感情のことですか？……確かに強欲、色欲、暴食、嫉妬、怠惰、憤怒、傲慢、でしたよね……」

そう、と相づちを打つ夜神。

「その七大罪のうち、どれかでも強い思いを持つてしまつたとする。すると、元々『心術士』（オーラ）は心を具現化させる者たちだから、光とは正反対の心を持つと、闇になつてしまつ……」

「……闇……」

「そして、その闇の道を歩む者の一つに入るのが、『咎人』（とがびと）……別名、シャドウとか、いろいろ呼ばれてるけどね……」

「……闇を、歩む『者』……？」

「それじゃあ……あれは……」

「元、『人間』だよ。」

鈴音は驚愕する。

あれが、人間？

信じられない。あの動きはまさに動物そのものではないか。

「『咎人』（とがびと）は、なにも入ろうとして闇に落ちたんじや

ない・・・無理矢理心の中の闇を引きづり出されて、それに心を覆われてしまつた者・・・被害者なんだよ・・・」

「・・・心を・・・無理矢理・・・？・・・そんなこと・・・できるんですか？」

「できる者がいる。闇の道を歩む、もつ一つの者たち・・・それが・・・『咎鬼』（とがおに）だ。」

『咎鬼』（とがおに）。

共夜が助けてくれたとき、発した言葉。

「ここからは被害者じゃない。眞の加害者。自ら心を闇に落とし、闇の力を操る者たちのこと。僕たちが戦つてる奴らのほとんどがこれだ・・・例外はあるけどね。」

「・・・例外・・・？」

そう、と相づちを打つのは、刹那だった。

「例えば、私とかね。」

鈴音は刹那のほつを見る。

鈴音は驚愕した。

・・・この人が・・・『咎鬼』（どがおに）・・・?

だが、驚愕するのはまだ早かった。

「それと・・・共夜もそうよ。」

絶句する鈴音。

・・・共夜が・・・?

わたしを・・・助けてくれた・・・彼が・・・闇・・・?

「だから、例外なんだよ、彼らは。」

そう言つて続ける夜神。

「自分の心を闇から光に変えて、闇の力で戦う、共夜や刹那・・・特に共夜は、その鬼神のごとき、特別中の特別の強さから、『心術士』（オーラ）からこう呼ばれている。」

そして、夜神は口を開く。

「・・・『闇の帝王』（ダーク王）（ダーク王）・・・

『闇の帝王』（ダーク王）（ダーク王）・・・

黒マークの野たちが言つてこた言葉。

「・・・『闇の帝王』（ダーク王）（ダーク王）・・・

鈴音は思つた。

共夜や、刹那さんが闇なら、こつたいたいどんな気持ちを持つて闇に入
つたのだろう・・・?

そんなことを考へている途中・・・

「さばみそ、お待ちぢやうつ……。」

そういって、夜神の目の前にさばみそを、食堂の店員が運んできた。

おおっ……と歓喜の声を上げる夜神。

「来た……僕の大好物なんだ、これ……。」

そして、鼻歌交じりで割り箸を割つて、魚に箸を向けた……。

ドガアアアアアアアンーー！

どこからか轟音が響いた。そして・・・

ヒュンーー！

ガシャアアアアアアーー！バチュツーー！

・・・・・夜神のさばみそが、飛んできたなにかにはじき飛ばされ
て、床にぶちまけられた。

「…………」

無言のまま、弋江で固まる夜神。

誰もが飛んできた方向を見る。

そこには……

「おひーあ……きつね終いか！？相送わいらすだつせんせんひだなあ、
共夜ーー。」

・・・魅守、そして・・・

「ふざかんじやねえ……」なんんで終わるか……」の1500才の
クソジジイ……」

お互い罵声を浴びせ合い、喧嘩になるのを繰り返す2人。先ほどの
食べ物の口論から、殴り合いの域にまで発展してしまったようだ。
共夜はすぐに立ち上がり、魅守をぶん殴ろうと足に力を込める。

だが・・・・・

周囲から人が、蜘蛛の子を散らすように逃げた。

「「？」？」

2人は不思議に思つ。

・・・・ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ

ゾクゾクウ！！

2人に戦慄が走る。

なにかの凄まじい殺氣が、2人を固まらせる。

そして2人は、殺氣のする方向を見る・・・

そこにいたのは・・・不気味なほどにつこり微笑む夜神。

「「・・・エ、エートデスネ、夜神サン、コレハ俺ノセイジャナク
テ・・・」

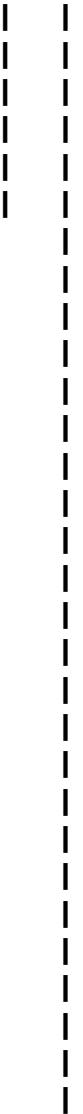
2人そて、先ほどあんな喧嘩をしていたのに、息ぴったりだ。

「・・・共夜君・・・魅守君・・・?」

そして、夜神が口元を緩めて言い放つ。

「お仕置きの時間だよ?」

その後、共夜と魅守は全治9ヶ月の大けがを負った。



「・・・・・・・・・・・・

「」
ある寝室。

そこに鈴音がいた。

鈴音はそこにあるベッドに横になつて、先ほどから眠りひとつしてい
る・・・

が・・・

「・・・・・ダメ・・・・・眠れない・・・・・」

そして、体を起こす鈴音。

鈴音は、どうしても眠れない。

眠つてはいけない。体がそう言つている。

もしかしたら『咎人』（とがびと）が襲いかかってくるかもしれない。
い。

保護してもらつているが・・・絶対安全と、自分ではどうしても断
言できない。

(・・・・誰か・・・・)

鈴音は願う。

(誰でもいいから・・・なぜばこ・・・)

そして・・・

「よお。」

鈴音はビクン・・・とした。

声のした方向を見ると、やじろこたのは・・・

「共夜!-?」

そこには、まるで死んでしまったかのように、少年（体中包帯でぐるぐる巻き）は、懐から線香を取り出して、火をつけた。

「あつ、あんた、なんでここに…？」

「…いやあ？どこかの誰かさんが怖くて怖くて眠れない、と言っていた気がしてねえ？」

鈴音は顔を真っ赤にする。

独り言で、口にしてしまっていたのだろうか。

「だ、誰が怖いなんて…それに、あんたみたいなボロボロの怪我人に頼らうとするほど私は…」

「あつそ、じゃ、いいんだ？俺もう帰るね。」

「あつ、ひょっと…・・・

ハツ！ 口にしてしまった。

口を手で覆う鈴音。

「…………怖いんだろ？ 鈴音…………」

今度はからかいつには言わず、優しく言葉をかけてきた。

「誰だつてそうだ。絶対安全とはわからない。いつ自分が死ぬか分
からない……そんなことを思えば、眠ることなんて誰もできねえ。
…………」

そして、共夜は強く叫ぶ。

「俺がそばにいる……そばにいてくれる人がいれば、いいだろ……
？」

鈴音はうつむく。

少しの間沈黙し、そして・・・

「・・・・・うん・・・・・」

そして、共夜はもう一本の線香に火をつけて、床に置く。

「」の香りをかぐと落ち着く・・・寝ても大丈夫だ・・・俺がいる・
・

やつ言つと、鈴音は安堵した表情を浮かべ、ベッドに横になる。

すぐに、すう、すう、と言つ寝息が聞こえてきた。

「・・・・・・・・・・・・」

共夜は鈴音の顔を見つめる。

・・・・そして、『あの人』を思い出していた。

自分に初めて優しくしてくれた『あの人』。

優しい笑みを浮かべてくれた『あの人』・・・

・・・大切だった、『あの人』・・・

・・・共夜はその人の名をつぶやく・・・

「・・・・雲・・・」

そして、そのまま鈴音は、長い夜を終えた。

—行間— 夢（カナシイキオク）（前書き）

k y o u y a

「お待たせしました11話で『さいます！－楽しんで読んでください！』」

共夜

「読んでくれる人は極端に少ないから、待ってくれてる人もあるまいないんじゃね？」

k y o u y a

「キサマアアアアアアアア！」

一 行間—夢(カナシイキオク)

(? ? ? ! ! ? ? ? ! !)

(・ ・ ・ 呼ん ・ ・ ・ でる ・ ・)

誰が?どうして?

そんなことは分からぬ。いや、分からなくてもいい。

誰かが私を呼んでいる・・・その声を頼りに、意識をそこへ引っ張らせるようにして、その声の主のところへ行く。

ゆつくり歩く私。

歩いて行く道は、といふのが、プラネタリウムの星のよつゝ、点々と光があった。

周りは、それ以外が黒で塗りつぶされた闇。

闇の中を、私は声を頼りに歩く。

そして、声のところにだんだんと近づいていく・・・声が大きくなつていく・・・そして・・・

(? ? ? ! ! ? ? ? ! !)

・・・わたしとは違ひ名前なのに・・・私のことだと思った・・・

なんだから分からぬ。・・・
心がそうつぶやいたように思つたから・・・・私はあそこに行く。

・・・見つけた・・・一つの、他のものより大きな光。
そこから声が響く。
それをそっと、両手ですくうように拾つ私。

すると、光が強く光り出した。

その光は虹のように輝く光を放ち、周りの黒を書き消していく。

・・・その光で、あたり一面が、スクリーンに投射したように、景色をえていく・・・

変わつた景色の中に、私は降り立つた。

「こひむどいだるわ。少なくとも私の知つてゐるところではない。
一言で言つなら、森。

あちこちに樹木が立ち、深い緑色のこけが生えている。
人の手など一切加わっていない、本当の森。

あたりの音は・・・今は冬だというのに・・・蝉の声で書き消され
ていた。

そして、時々聞こえる鳥のさえずり。

不快に思わない。音が自然に溶け込み、私を静かな気持ちにさせる。このまま、しばらくこいつして、ただただ立つていい。

・・・そつ思つていた。

ドシャアー！ブチャツ！！

全く自然の音とは思えない、なにかを切り裂くような音が響いた。

その音とともに、蝉の声が消える。

鳥たちが飛びたつて逃げていく。

音の響いた場所へと私は駆ける。

・・・景色が、色を変えた。

深い緑で彩られた森が、突然、昼から夜になつたかのように青黒くなつた。

心がズキズキと痛んだ気がした。

引き裂かれそうな心・・・その痛みをこらえて・・・涙を流しながら・・・なぜ涙を流すのか分からぬが・・・私は走つた。

そして・・・

「し・・・・・すく・・・・?」

声が聞こえた。少し高い声。

その声は、私の知っている声だつた。

だが、違う。

声の震えから感じ取ることのできる、深い悲しみ

聞いたことのないアイツの声だつた。

その声が聞こえたところを見た。

そこには、紺色の髪をした少年・・・そして、その少年に抱きかかえられた・・・黒い髪をして、白く輝く肌・・・そこには赤黒いなにかが点々とその人に付いている・・・女人の人気がいた。

その女人人は、巫女装束のような服装をしていた・・・そして、そ
の女人から・・・線香の香り・・・

景色が、と音を立てて崩れていく。

森の景色は、ガラスが壊れるように消えていき、そしてそこにいた紺色の髪の少年も・・・巫女装束の女人の人も・・・その景色とともに消えていった・・・

そして、また、プラネタリウムのような景色に戻る。

そのとき、私は涙を流していた。

(なんで・・・)

分からぬ・・・涙の意味が・・・
だが、悲しい・・・その感情が、私の目の奥を熱くさせ、私の胸を
ズキズキと痛めた・・・
なぜそんなに悲しいのか・・・考へている内に、私はまぶたが重く
なつていき・・・

私の意識は途切れた。

—行間— 夢（カナシイキオク）（後書き）

すいません、今回めちゃ少ないですね。

今やつてる原稿の代わりをと思って、これ載せました。
がんばって明日ぐらじこにはのせます。スマセン。

最悪の一冊の始まり（前書き）

お待たせしました！！闇の帝王の最新話ですーー！

文が異常に短いけどそんなの気にすんなーー！

最悪の一日の始まり

(・・・ああ、わかった。これってあれよね~悪い夢ひもせつね~。)

そして鈴音は自分に聞こ聞かせる

(早く起きなこと学校に遅れちゃうかも だから早く田を覚まして
ええええー!)

だが、全く夢みたいな感じではない・・・田覚める気配、0。

(・・・なんで・・・)

改めて、前を見る鈴音。

鈴音がいるのは、鈴音の通う学校。

彼女の教室は、ざわつこしている。

それもそつだつた・・・転校生が来たのだから。

そして・・・その生徒とは・・・

(なんであこづらがいにこんのをおおおおおー!?)

心の中でツツコむ鈴音。

・・・教卓の前に、あるやつらがいる。

3人。

1人は、金髪に近い茶髪の髪の男。

1人は、これまた金髪に近い茶髪をした、ナイスバディの女人の人。

そして・・・もう一人は・・・
紺色の髪をした、あいつ。

そもそも、なんでこんなことになつたのやら・・・鈴音は一人、密
かに今日の朝のHピソードを思い出す。

「・・・あれ・・・?」

鈴音は起き上がった。

でも、昨日寝た、『地獄ノ番犬』（ケロベロス）の寝室ではない。

いつもの、寮。

「？？？あれ、私つて・・・」

そうして、考えようとしたそばから・・・

ガンガンガン！！

玄関をたたく音。

その音に、鈴音は警戒する。

『咎人』（とがびと）が襲いにきたのかもしれない・・・
そんな考えが、鈴音の脳裏によぎる。

そして、ゆつくつと玄関ののぞき口から、外を確認する。
そこには・・・

「すうーずうーねーーーっつーーー！」

彼女の親友。

藤井 萌がそこにいた。

ホッ、と胸を撫で下ろす鈴音。

そして、ドアの鍵を開けて、玄関を開ける。

「萌、どうしたの？」

「ビーナしたのじゃないよ。一緒に学校行こ? 時間やばいよ?」

そして、鈴音は時計を確認する。

時計は、短針が8、長針が3を指していた。

•
•
•
8
:
1
5°

登校しなければいけない時間は、
8：30。

鈴音の寮から学校まで、歩いて約30分かかる。しかも鈴音はまだ起きたばかりで朝食すらとつていない。

どう考へても走つていかなければ間に合わない。

すぐにパンを口に放り込んで、萌を置いていくつもりかといづくら
いのスピードを出して走行する鈴音。

「待つてつてば……鈴音ええ……置いていくなんてそれでも親友か
あアアアア……」

後ろで何か怒鳴ってるが、気にしない。

「少しば気にしろオオおおおおおお……」

ゼーハーゼーハー、と息を切らして教室に入る一人。
なんとか間に合ったようで、安堵のため息 + をはぐ二人。

「な・・・なんとか・・・間に・・・ハア・・・ハア・・・合った・
・・・」

「・・・鈴音・・・絶交・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・・」

ごめんって、と言つ鈴音に対し、許シテタマルカ、と返事をする
藤井。

そしてそのまま、1・3と書かれた、プレートがかけてある教室に入る。(こ)が鈴音と萌のホームルーム)

そこには、ガヤガヤと騒ぐクラスメイト達がいた。

「マジでー!? 転校生くるのー!?

「今の時期に、なんで?」

「親の仕事先で外国に行ってたんだって。」

「で、どんな人なの?」

「結構美形だつて、髪が紺色なんだつてー!ー!」

紺色おー!?と生徒達はわいた。

紺色の髪など、普通ないからだ。

・・・その言葉に、鈴音も、生徒達とは違う意味で反応する。

(・・・紺色・・・?)

なんだか妙に身近なワードのような気がしたが・・・あれ?

・・・あれ?

「どうしたの？ 鈴音。」

萌の言葉は届いていない。そして何か考え事をするような顔になつたかと思うと・・・

ビックウーーと体を震わせた。

それにつれられて萌も体をビクンと震わせる。

「なななななにーー? どうしたの、 鈴音ーー?」

「ありえないありえないありえないありえないありえない絶対ないから絶対ないから絶対絶対だから安心してオッケーーー!」

「誰か通訳お願いーー? 鈴音が壊れたーー!」

・・・今度は鈴音の方に目線が集中。そんなことも全く気にせず独り言を何度もつぶやく鈴音。

(大丈夫よ鈴音、「んなときは深呼吸よ深呼吸、さあ息を深く吸つて 吐いて すつ)

ガララララ。

扉が開く。

ウグツ！…と息を詰まらせて、危つゝ窒息しかけた鈴音。その窒息しかけた鈴音から、またビクンと反応する萌。

そこに担任の先生が現れる。

青崎 照真といつ名前の、名前からするとちょっと意外な女の先生。

フウ、と安堵の吐息を吐く鈴音。

その様子を見て、『ホントにどうしたの、鈴音！？』なんて言つて
いるが、全く耳に入つていない鈴音。

(・・・はあ・・・びっくりし)

ヒヨイ、と教室に入つてきた人がいた。

それを見て、凍り付いた鈴音。『鈴音！？帰つてこい鈴音エエエ
えええ！？』なんて叫ぶ親友を全くスルー。

・・・鈴音にめちゃくちゃ見覚えのある紺色の髪をした線香中毒者が普通に入つてきましたね、ハイ。

上半身をだるそうに傾け、結構長めのズボン・・・鈴音の学校の制

服・・・を着て、これまだるそつに歩き、教卓に上る男。
だが、けつこう顔がいけてるため、女子から『おおおおおっ！』
と歓声がする。（約1名を除く）

先ほどまで鈴音の変な様子におひおひしていた萌も、「けつこう
いかも！」なんて言つてる。

未だに固まつたままで動かない鈴音。

（だ、大丈夫よ鈴音。あんな顔はよくあるものよ、よく似た他人よ
く似た・・・）

そんな中、黒板の方にある名前がすりすりと、照真先生によつて書
かれていぐ。

・・・はつきりと、聞き覚えも見覚えもある漢字が書かれた。

霜月 共夜

（だからよく似た他人そしてよくある名字だから大丈夫大丈夫そん
なことないそんなことないないないないないマジでないからア
アアあああ！－）

心の中で悲鳴を上げる鈴音。『鈴ううううずうううネエえエエええ

なんか変な声が聞こえるが全くのスルー。

そんな中、照真先生がそこそこいる転校生に対して話しかける。

「じゃあ、自己紹介してもらいます。名前は？」

そして、それに返事をする転校生。

「・・・霜月 共夜。親の事情でオーストラリアの方に行つてました。よろしくお願ひします。」

精神的にすんごく追いつめられた鈴音。だが・・・こんなもので彼女の不幸は終わらなかつた。

「あれ・・・？霜月って・・・？」

その瞬間、鈴音はすんごくいやな予感がした。

「・・・あつー。」

急いで萌を静止しようとする鈴音。だがもう遅い。

「鈴音の恋人じやん！！」

教室が、沈黙に支配された。

その中で、共夜だけが動き、鈴音にむづくづ近づき、そして・・・

「よつ、鈴音。久しぶりおうばあアアアアアアア！？」

もう混乱しまくつの鈴音は、とりあえず空氣読めない田の前の男を正拳突きで黙らせることにした。

最悪やがれのこゑせんがる（漫書也）

ダメだ。前書きもあとがきも書く暇がねえ・・・！

最悪すぎるのこもほじがある

「　　つの萌のバカアア ああああーー！」

「あつだああアアアアアアアあつつーー？」

鈴音は自分の親友に対して、頭を平手打ち。

ペチーン、とか生優しい音ではなく、もはやバーンーーとこう手加減一切なしの炸裂音が響いた。

「変な噂みんなの前で広げるなーーなんでこいつヒレ、ヒレ、ヒレ、恋
人なんかにーー！」

「だつて鈴音、この前そう言つてたじゃんーー！」

「言つてないわアーー！」

鈴音はゼロ、ゼロと息を切らして大声で怒鳴る。

萌はいつもこんな感じだ。

こんな風にいつもいつも私に対する変な噂を勘違いで流す。
そのせいで今まで何度も泣かされたことか。（その度に何度もこんな
風にやつてあいつを泣かせたことも数知れず。）

流されたデマの数や内容は数知れず。泣かせた回数も泣かされた回
数も数知れず。恐るべし。

そんな感じで、そこで顔面に正拳突きを喰らつた人を無視して口喧嘩を始める开始了。

「こきなし顔面正拳突きはないだろ」の暴力女ゴギュ

もうひとつおしいからもう一発ぶちかますことにした。
おウアあああああああーーと悲鳴を上げる共夜。

そんな仲を見せてるとこ、外野はまだ萌の噂でわざわざして
いる。

「水鏡の攻撃喰らつてまだ起き上がるとは・・・恐るべし。この
根性に負けてつき合つたんじゃねえか？」

「ええー？でもそれだと共夜くんつて・・・？」

「いや、それはないっしょ？きっと勝負して鈴音が負けたんでしょ
？」

「といつより、けつこうイケてると思ったのに、鈴音に取られてた
のが残念・・・」

「でもあれだと、私たちにもチャンスあるんじゃない？」

・・・なんだか、私が武人見たく見られてると、なんか共夜についていろいろ勝手にキャラ付けされてる気がする。
これもあるハイテンション少女のせいだこんちくしょ。

・・・とかなんとか言われて、共夜が激痛に悶えている様子なんか誰も気にしないようです。

「ぐおーらりア鈴音エーー再会だつてのにあこせつがこれか！？以前よつせりに悪化してんだボケエーー」

復活の呪文でも誰かに入れてもらつたか、すぐにムクリと起き上がつた共夜。

右頬を痛そうにさすつて、ちょっと涙田になつてている。

このとき共夜が密かにこんなことを思つていたのは鈴音には秘密である。

(なんだこいつに男子が寄つてないのかわかった。いつたいこいつて何人の男子の夢をぶち壊してきたんだろう、こいつ。)

その時、『以前より』といづれ葉に反応して、萌が声を上げた。

「ねえねえ共夜君！ーーいつ鈴音に会つたのーーいつからの知り合い！？そして馴れ初めはなに！？」

ドグン！！と激しく心臓が波打つのを鈴音は感じた。

マ・ズ・イ！ なんかマズイ！！

鈴音は内心密かに悲鳴を上げる。

こんなとおりまたでしゃせりやがつての口つ顔オオおおおおおおお

人に言えるわけがない。家に忍び込んで食べ物を食いつあさつてたのが初めての出会いなんて、そんなの嫌。

そんなフルパニック状態の鈴音に反して、ああ、それな。と共に夜は普通に答えようとしている。

・・・まあ、こいつに直接かかる」とだからなんかひねり入
れてなんとかすると密かに安心する鈴音。
だがそんな期待を共夜は無慈悲の一撃で粉碎する。

「いや、実はここに来て、いろいろ町のことを把握しようとと思つて探索してたらいきなし腹へつて『あんたつてやつはもうちょい自重しろオオおおおお！』『いきなしなんだよ鈴音、別に恥ずかしがることでもないだろが。』

「いや、でも眞っ直ぐじゃないーー！」

そつして口喧嘩（周りからそつ見られてしまつてゐる）をしてこるつちに、周りにクラスメイトが集まつてきやがつた。

鈴音の親友のよつな最悪野郎が主である。

「ホホウ！ そんなに恥ずかしがるとはなにかあると見える……まあ、白状するのよ鈴音、いつとくけど扉の鍵は全部閉めてあるから出ぬうと思つても」

その続きの言葉は未來永劫言わることはない。

なぜって？それは、

バギーン！！

派手な音を立てて扉を乱暴に開けて（というよりぶつ壊して）外に出た鈴音。『ヒイイイヤアアアああ！？火事場の馬鹿力ああアアアアア！？』と叫ぶ共夜。

そしてそのまま疾走してクラスと言ひ名の魔獣達から逃走した鈴音。

その様子を見て、クラスメイトはまだポカーンとしていた。
『『はつ！－エスケープ！？』』と萌と照真先生が叫ぶのは5分経
つてからである。

「ハア、ハア、ハア……」

「なんであんなに焦つて出るんだよ。そしてなんだあの馬鹿力は。お前ホントに人間か？」

「うう……わいわね……ハア……この……バカ……」

バカはお前です、とありがたいお言葉を共夜からもらつた。あとで裏拳ぶちかまされる運命が決定したことを探らない共夜に、鈴音は問う。

「とこりよつ、なんであなたはここにこんの……」

「え?だから恩人にお礼に来ちゃいけねえの?」

「恩人つて……あんた、私の『だつて自分の飯になるはずだつたもの食わせてくれたんだもん、お礼参りぐらいしたくなるつて。』あんたが勝手に食いあさつたんでしきうが!…」

「田の前にめぢやつまそつな飯があるもん、そんなの我慢できつかつてやつなのよ!…」

「少しば自重しろボケコラ」

もうじつたいなんなんだこのバカは。

話してるだけでこんなに体力使うとか、どんな体力の無駄使いだ。
しかもそんだけ体力消費しといて目の前の紺髪（めんどいから）これからこう呼んでやることにした（線香中毒者はムカツクくらい涼しい顔してやがる。

「ああ、もう、なんで私の周りでやっかいなことばっかり起じりまくるのよ！？」

「なんでそんな冷たい目で俺を見んだコラ……まさかそんなに俺も入つてんのか！？入つてんだなこのやうう！」

「まさかも何も入りまくりよブラックリスト入りよーー！入つてる自覚すらないとか最悪よこのバカ！！」

今は授業中です。静かになさい2人とも。ギヤーギヤーと周りのことすら考えずに騒べ2人のもと…

「ハイハイ、セニのおふたつさん？」

鈴音はギョッとした。

この冷たくて底の知れない声は…

「仲がお熱いのはよろしこのですけど、もう見つけちゃいましたよエスケープ野郎ども。」

ドッと汗が噴き出すのを、鈴音は感じる。

こつちは鳥肌たつて戦慄が走りまくっているのに田の前の紺髪野郎はクエスチョンマーク頭に浮かべてやがる。

そして鈴音はギギギ、と音を立てて（いると思われるような動作をして）後ろを見る。

すると、そこには眼鏡をかけた、自分のクラスの担任が。生徒指導で青鬼と陰で呼ばれてしまってる照間先生がいます。しかもにっこり笑顔で。

「もう逃がしませんよ水鏡さん。霜月君も、転校初日でエスケープですか、そうですか、まず最初にきつちんとこここの校則を身にしみれる必要がおありますね。そうですね。」

はあ、いつもの照間先生だ、日常だと喜びにかすかに浸つては絶望に打ちひしがれるロング髪の少女。

「ちょ、許してくださいって、俺別にエスケープしたかったわけじゃないませんって！－！」

あたふたする共夜を見ても、照間先生はにっこりと笑うばかりである。

「れ・ん・た・い・せ・せ・て・て・ん・です。」

「うええええ、と嘆息する共夜。

「ちっくしょー、鈴音、おまえのせいだぞこの野郎ーー。」

「うわせこーー少しさほの減らす口直せーー。」

「ああもう私の平穏の学校生活返せこの変態ーー。」

「誰が変態じやこのボケエーービーーひくんが変態か3秒以内に述べてみる『ルア 鈴音ーー。』

「性格。」

「迅速かつ心を抉る的確なお言葉見事でありますこのドリーー。」

またギヤーギヤー騒ぎだした2人。

その2人を見て、またさらに『悪魔の微笑み』を深める照間と言つ名のウリヒル様。

ボコボコされるのはまた後のお話である。

ある場所があつた。

何もない黒の空間。其夜と鈴音が渡つたあの道と違つて、またさら
に寒さと暗さを深くした空間。

誰もこんな空間を好む者はいない。

誰もこの冷たさを心地よいと思う者などいない。

・・・少なくとも、ある人物以外は。

そこに、夜神はいた。

誰も愛さないこの空間を、彼は愛していた。
これこそが、彼の心を 人の心を表していると理解していたか
ら。

人の心にはいろんな色がある。白・青・赤・緑・・・それらはすべて
その者の心を表す。

だが夜神は知つている。

黒こそが人間の根底にある心。

闇こそが人間の深い深い場所に埋め込まれた気持ち。

理解する者しか好みこの絶対的な黒・・・真の人間を彼は愛する。

「・・・やつぱここはいいなあ・・・」

だが、理解する者は彼しかいない。

彼しか、本当の人間を理解できないから。

「・・・人間つてのは、黒い生き物だ。」

誰にともわからず、夜神は語り始める。
闇のなか、本当の人間を語る。

「人間に白はもともと無かつた。生まれたときはただの動物。そこにあるのはただ生きたいと願う黒のみ。そして黒は色彩を変えいろいろな色に変わつていった。黒こそが原点。すべての始まり。生きたいと願う『想い』の中から人はいろんな『想い』に気づき、心のアートを作り出す。」

そしてその男は続ける。

・・・それはまるで、自分の心に語りかけているよつにも思えた・・

「だから僕は黒が好きなんだよ・・・わかるかい?・・・刹那。」

そして、闇から1人の人間が現れる。

そこにいるのは金に近い茶髪をした女性。その表情は苦々しく、足取りもどこか重々しく、震えている。
額から冷や汗が一筋垂れ、それを右手で拭う。

そして一步ずつ歩み寄る刹那。

彼女は彼と違つてこの空間をひどく嫌う。

・・・彼女はこの冷たく、孤独を思わせる黒が嫌いだから・・・

「・・・持つてきてくれた？例の物は。」

「・・・はい。でも、これなんなんですか？」

黙つたまま、刹那はある物を取り出す。
紙だつた。何の変哲もない、ただの紙。

「別に知らなくていいことだよ。いつに渡してくれ。早く。」

夜神は右手をスッと出し、その手に刹那は震える手で、その紙を乗せる。

そしてそれを夜神は開いた・・・

そのときだつた。

「アツハハハハハハツ」

その手紙を見て、笑い出した夜神。

その様子を見て刹那はポカンとする。

「やべれたねえ、刹那。」

そして夜神は紙を刹那に渡す。
そして刹那はそこに記述されていたことを見て、ヤヨッとした。

『前略

やつほう夜神クン元氣い？この紙を見たテメエの顔が皿に浮かぶ
なあ、総隊長。

残念だけど例の物はこっちで処分しどくわ。刹那と他のやつらを
用いての無駄な努力、『^{ダーカンペリー}苦労様。

あ、あと刹那。バカでありがとう。そっちの企みモロバレしたの
アンタのおかげです。感謝感謝。それじゃグッバイ。』

あーあ、と呆れたよつて声を出す夜神。

「彼じやしょうがないね。伊達に『闇の帝王』^{ダーカンペリー}の名を受けたるわけ
ではないね。」

「・・・共夜。」

「「うちの企みモロバレか。ま、いいや。いつでもないと面白くな
いし。」

「・・・総隊長。」

「うん、それに警告だつてあるから簡単には動けないや。この任務
はしばらくこよ、鈴音。」

警告?と刹那は問う。

そして夜神は笑顔で右手の人指し指を下に向ける。

「その文の下。」

刹那は下を見る。

そして、時間が止まつたと思つた。

『P.S.

そして更に下には、

『もし今度こんなマネして見やがれ、』

絶望が胸の中に広がる、

『そんとさせは・・・』

共夜の意思。

『地獄ノ番犬全部潰してやる』
ケロベロス

一切冗談抜きの、殺意を込めた共夜の言葉に、刹那は言葉を失う。手が先ほどより震え、冷や汗で手紙が少しにじむ。

そんな刹那とは対称的に、夜神は全く表情を変えず、ニコニコしている。

それが刹那の？？夜神が好む心の黒？？生存本能を一層激しくする？？？

「ちゅうどいいや。」

次の言葉で刹那は確信する。

「退屈だったんだ。嬉しいよ、共夜」

・・・夜神は狂っている。

そんなことも知らず、鈴音は眠っていた。

これは、鈴音の長い夜の終わりにあつた、とある2人の、意志の戦いである。

『かなり重大なお知らせ』

今日ここに重大発表（でもないこと?）を告白します。

・・・実はこの作品を、ロンクール作品として発表したいと思っています。

原稿は大改造するし、万が一、億が一にこの作品が、もし入賞出来たら、これもう消します。

落選したら（とゆーかほぼ絶対落選する）、その大改造を施した、リメイク小説をここに出します。

更新はもしかしたら半年くらいないと感じます。他の作品は頑張つてやりますが。
とりあえずはそれだけです。

この小説を読んでくださってる皆様に「迷惑をおかけします。もづしづけありません。

「Jの小説を愛読していただいた皆様（いなかもしんねえ・・・
〇・・）、まことに申し訳ありませんが、この小説は「」ここまでです。
元々この作品は試験作品として提出したものでした。この試験作
品をキチンとした形で作成している作品がありますので、そちらを
検索し、読んでいただければ幸いです。

尚、本作品では、試験作品と若干内容が異なりますので、「」を承
下さい。

では、闇ノ帝王 Dark Emperor にてまたお会いし
ましようノシ

・・・来てくれる人が10人と満たない方に一票（T—T）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8974m/>

闇の帝王（ダークエンペラー）

2011年3月15日23時50分発行